

第1章 「主体的な学び」の創造

「課題発見・解決学習」をはじめとした「主体的な学び」の創造

「主体的な学び」を促す教育活動の一つとして挙げられるのが、「課題発見・解決学習」である。求められる資質・能力の育成を目指し、「主体的な学び」の創造に向け、自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探究的な活動をしていく「課題発見・解決学習」等を推進し、教育活動の充実を図ることが重要である。

1 「課題発見・解決学習」について

(1) 「課題発見・解決学習」とは

「課題発見・解決学習」とは、児童生徒が自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探究的な活動をしていく学習である。

「課題発見・解決学習」には、次のような活動が考えられる。

〔課題の設定〕, 〔情報の収集〕, 〔整理・分析〕, 〔まとめ・創造・表現〕, 〔実行〕, 〔振り返り〕など

これらは、いつも順序よく形式通りに繰り返されるわけではなく、順番が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。また、この過程は、次のページの図に示すように何度も繰り返され、スパイラルに高まっていく。特に、充実を図ることが求められるのは、〔課題の設定〕, 〔整理・分析〕, 〔振り返り〕である。

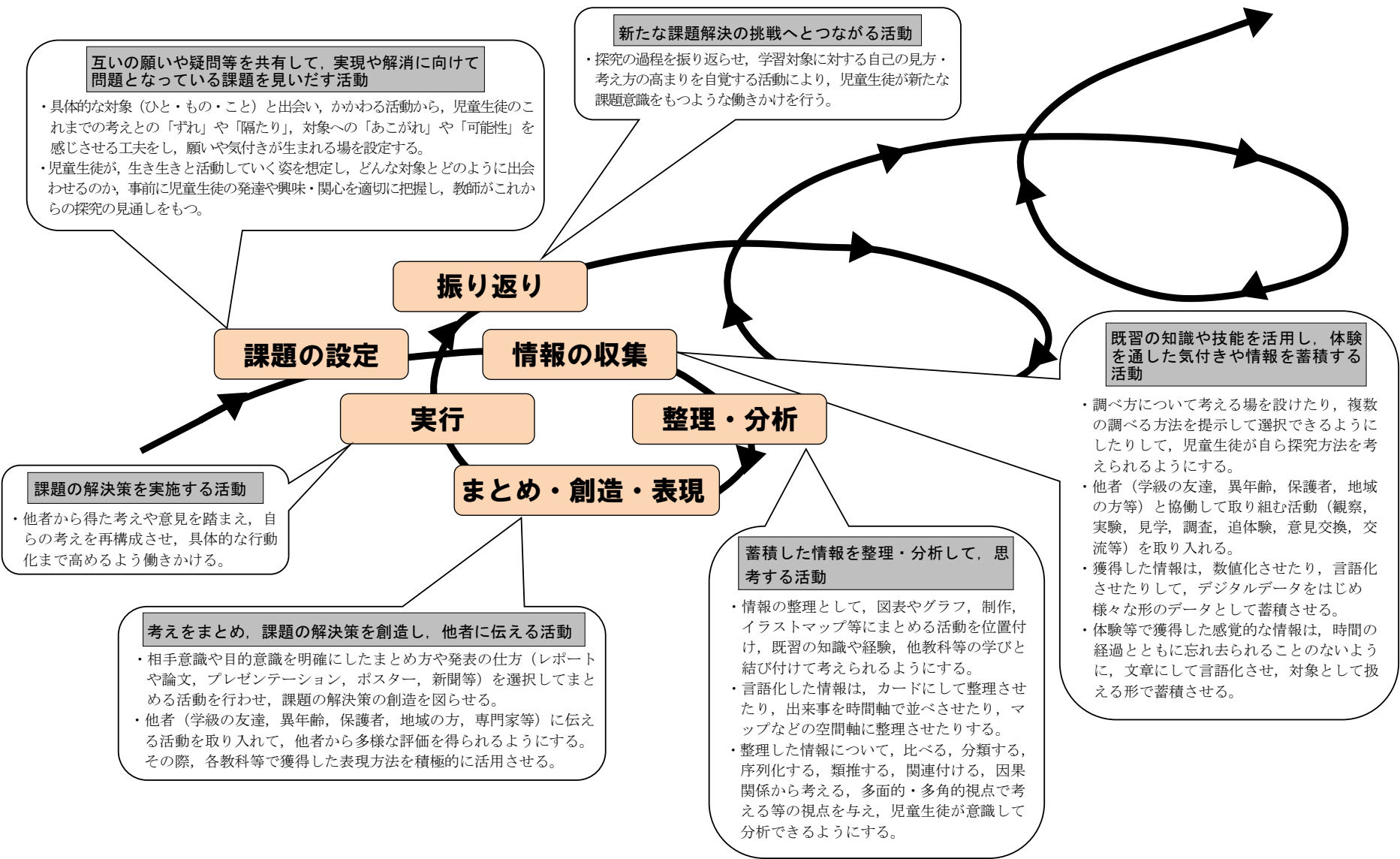
〔課題の設定〕は、児童生徒が自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することが大切である。しかし、児童生徒が自ら課題をもつことが大切だからといって、教師が何もしないでじっと待つ、あるいは、教師が一方的に「今日は、〇〇について勉強します」と宣言するだけの課題の提示では、児童生徒の本時の学習に対する課題意識や学習への意欲は喚起されない。そこで意図的な働きかけをすることが大切である。事前に児童生徒の興味・関心等を適切に把握し、これまでの児童生徒の経験や既有的知識等との「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫が必要である。児童生徒に「気になるな」という違和感や「何とかしたい」という必要感などをもちさせることができれば、児童生徒自らの課題意識へとつなげ、「めあて」をもちさせていくことができる。

〔整理・分析〕については、収集した情報をそのまま模造紙に書き写して発表するなど、児童生徒の思考、判断する場の不足が課題として指摘されてきた。こうした状況を改善するためには、収集した情報を比較したり、分類したり、因果関係を捉える等の視点を状況に応じて教師が児童生徒に示し、児童生徒の思考する活動を促すなどの取組が必要である。

〔振り返り〕については、「めあて」に対応した「まとめ」を行う際、できたか、できなかったかという結果だけでなく、「授業で習う内容は、こんな形で実社会とつながっている」、「自分たちで考えることは楽しい。もっと〇〇について調べてみたい」、「今回は〇〇が原因で失敗したので、次回は△△の視点からアプローチしてみよう」といった思いを児童生徒がもちることにより、新たな課題解決の挑戦へとつながり、主体的な学習を進められるようになる。

「課題発見・解決学習」を進めるに当たっては、活動自体が目的化したり、形式的に繰り返したりすることがないように、留意することが大切である。

「課題発見・解決学習」の過程（イメージ）



その際に、「『課題発見・解決学習』の単元計画を見直す視点」の例を以下に示す。

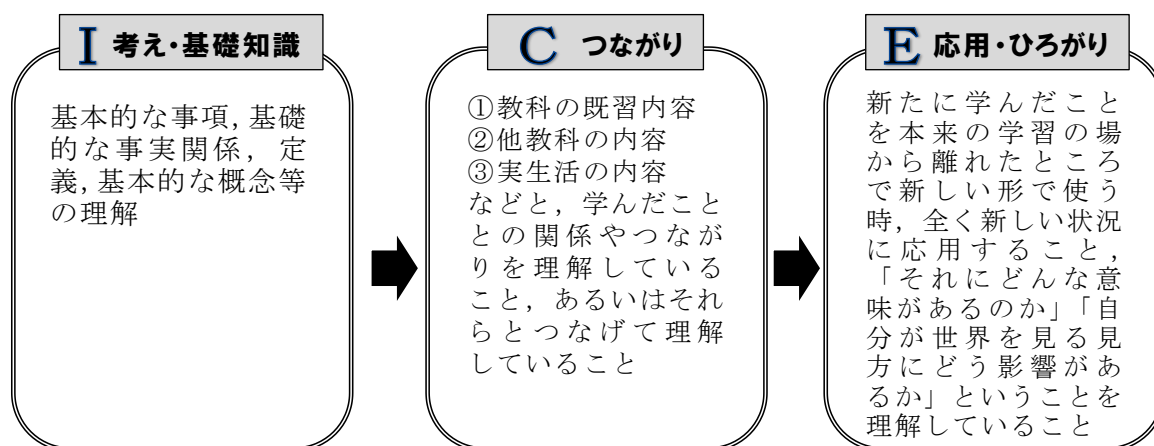
【「課題発見・解決学習」の単元計画を見直す視点（例）】

- 目標に迫る問いを、児童生徒から引き出せているか。
- 児童生徒に課題解決の見通しをもたせているか。（既存の知識や経験、他教科等の既習事項の活用 等）
- 児童生徒にとって、課題解決に向かう必然性のある学習活動となっているか。
- 児童生徒の深い学びを実現するための指導の工夫が行われているか。
- 目標に向かって児童生徒の深い学びが実現していく姿を具体的にイメージできているか。
- 児童生徒が、自らの見方・考え方の高まりや学習の仕方を振り返ったり、それらを活用できる場面を考えたりする「振り返り」の場が設定されているか。

(2) 「課題発見・解決学習」の質の高まり

「課題発見・解決学習」の質をより高め、学びを「主体的な学び」にしていくためには、基礎的・基本的な知識・技能に留まるのではなく、それらをつなげ、いろいろな場面で活用できる知識・技能に高め、それらを統合して新たな価値を創造していく必要がある。

その過程を捉えるための一例として、Sue Fostaty Young・Robert J. Wilson (2013) の I C E モデルがある。「考え・基礎知識 (Ideas)」、「つながり (Connections)」、「応用・ひろがり (Extensions)」といったように、学びの質の高まりを重視し、その変容を捉えることができるものである。



それぞれの段階の活動で使用される「動詞」の例を次に示す。

考え・基礎知識	定義する, 記述する, 説明する, 暗記する, 計算する, 反復する 等
つながり	比較する, 分類する, 推論する, 差別化する, 統合する 等
応用・ひろがり	発明する, 創造する, 提案する 等

これらの動詞は、異なる認知プロセスを示すので、学びの深さもそれぞれの段階によって異なることが分かる。

例えば、中学校音楽科で、「大地讃頌」を教材として扱う題材では、次のように考えられる。（詳細は「平成 29 年度 広島県教育資料」 P 113～115 参照）

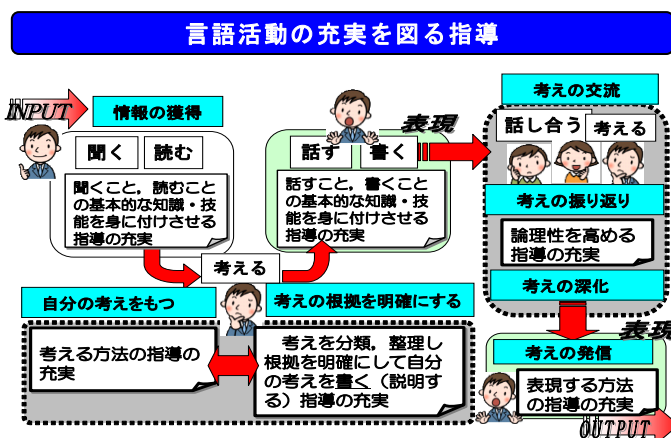
考え・基礎知識…合唱曲「大地讃頌」の音楽を形づくっている要素を知覚・感受し、国語科や社会科との関連を図って、歌詞の内容や楽曲の背景等を理解している。また、音楽表現を創意工夫するための技能を身に付けて歌っている。
 つながり……………「大地」や「平和」などをテーマにした楽曲を比較して聴き、曲想や歌詞に込められた思いなど音楽の特徴について、共通点や相違点を捉える。また、他教科との関連を図り、「大地」や「平和」をテーマにした文学作品や美術作品に込められた思いを捉え、自らの「大地」や「平和」への思いを深める。これらを統合し、自分たちなりの「大地讃頌」の音楽表現を創意工夫する。
 応用・ひろがり……合唱曲「大地讃頌」で身に付けた力を活用するとともに、自分たちの地域の自然などへの思いを込めて、地域をテーマにした合唱曲をつくり、地域の方を招いて音楽発表会を行い、作品を披露する。また、その作品の歌詞に込めた思いなどを地域の広報紙で紹介する。

このように「考え・基礎知識」から「応用・ひろがり」までを教師がイメージし、児童生徒にもこれらを示すことにより、「課題発見・解決学習」の質をより高めていくことが期待できる。

(3) 「課題発見・解決学習」において求められるもの

ア 言語活動の充実

知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのも、全て言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力である。したがって、「課題発見・解決学習」を推進していくためには、言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動の充実を図ることが大切である。



(ア) 育てたい力の明確化

各教科等の授業に言語活動を設定する場合、児童生徒にどのような力を育てたいのか、教師が目的を明確にすることが大切である。

新学習指導要領でも引き続き、国語科だけでなく、全ての教科等において言語活動の充実を図ることが求められているが、このことは、言語活動を充実すること自体を目的としているのではない。言語活動を効果的に設定することにより、児童生徒に、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育み、教科等の目標を実現することが目的である。

県教育委員会では、「言語活動を通して育てたい力」を明確にした指導事例

を作成し、各学校が研修等で活用できるよう、ホームページに掲載している。

参考HP：ホットライン教育ひろしま
「ことばの教育県づくりの推進」—「言語活動の充実」に関する指導資料—

(イ) 目指す児童生徒像の共有化

言語活動の充実を図った教科等の授業を実施することによって、どのような児童生徒の姿を目指すのか、校内の全ての教員がイメージを共有することが大切である。

例えば、「自分の考えをもち、根拠を明確にし、自分のことばで適切に表現することができる児童生徒」というような児童生徒の姿を設定することで、指導の目的が共通理解され、効果が高まる。

さらに、校内でイメージが共有できたら、担当している学年や教科等においても、指導後の児童生徒の姿を設定すると一層効果的である。

参考：本誌 第2章 『確かな学力』の育成（ことばの教育の推進）P95～97

イ 体験活動の充実

小学校学習指導要領（平成29年）総則には、体験活動を重視することが示されている。

また、同解説総合的な学習の時間編には、「児童が身体全体で対象に働きかけ実感をもって関わっていく活動が体験活動である。」と述べられている。さらに、人々や社会、自然と関わる体験活動を通して、自分と向き合い、他者に共感したり社会の一員であることを実感したりすること、自然の偉大さや美しさに出会ったり、文化・芸術に触れたり、社会事象への関心を高め問題を発見したり、友達との信頼関係を築いて物事を考えたりなどして、喜びや充実感を実感することができる」と述べられている。

体験活動は、単に何かをやってみるということではなく、教科等の目標の実現を目的として行われなければならない。また、調べたことをまとめ、発表するだけでなく、自分達が考えたことを更に実行するところまで活動を進めたい。例えば、地域産業の振興策を児童生徒が様々に考えて提案し、それを実行してみるといった、児童生徒の主体性を引き出す活動である。

「広島版『学びの変革』アクション・プラン」でも、「実社会との繋がりを重視した体験的な学び」を重視している。「体験活動」は、「課題発見・解決学習」を推進する上で求められるものの一つと言える。

ウ 知識・技能を活用する学習活動の充実

総合的な学習の時間を始め、各教科等の学習において「課題発見・解決学習」を推進するためには、教科等の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習

小学校学習指導要領（平成29年）

第1章 総則（第3の1（5））

児童が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること。

※ 中学校、高等学校及び特別支援学校小学部・中学部も同旨

得とともに、現在でも取り組まれている「観察・実験の後、その結果を基にレポートを作成する」、「文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えを論述する」などの知識・技能を活用する学習活動の充実を図ることが大切である。

知識・技能を活用する学習活動を行う際、「活用の学習活動を行うためには、まず基礎的・基本的な知識・技能を習得させなければならない」、「学習につまずきが大きい児童生徒には、活用の学習活動をさせるのは無理であろう」、「知識・技能の習得は、習得の学習活動の中で、思考力・判断力・表現力の育成は、活用の学習活動の中で行う」等といった誤った捉えがされている現状もしばしば見受けられるので、留意することが必要である。

「習得」や「活用」の学習と「探究」の学習は、決して一つの方向に進むだけではなく、例えば、知識・技能の「活用」や「探究」がその「習得」を促進するなど、相互に関連し合っただけで確かな学力（基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学習意欲）を伸ばしていくものである。

また、学習につまずきの大きい児童生徒は、暗記や反復を嫌う傾向があり、知識・技能の習得・定着が進まないが、「活用」や「探究」の学習の過程で、学習意欲が高まり、その児童生徒の過去の体験や既存の知識と結びついて学習が進むことがある。知識・技能の習得・定着には、反復・練習というドリル学習も大切であるが、そればかりではなく、教科等における「活用」の学習や「探究」の学習において、知識・技能を活用する多くの体験をさせることによって、知識・技能の定着が強化され、一層確かなものとなる。

エ 協働的な学習の充実

変化の激しい今後の社会では、多様な他者と協働できる力を有する人材が求められている。「協働」とは、「他者と関わることにより、異なった価値観や考え方に触れ、自らの考えを広げたり深めたりしながら、他者と考えを共有し、共に行動に移すこと」である。

現在、総合的な学習の時間や各教科等において、協働的な学習が行われているが、注意すべきことは、協働的な学習を単なるグループ学習と混同しないことである。協働的な学習は、活発にグループで話し合う授業とイメージされやすいが、重要なことは、一人一人のものの見方や経験等に基づいた異なる価値観や考え方を互いに尊重しつつ、児童生徒が話し合うことによって多様な考え等に触れもっとよい考えがあることに気付いたり、他者の考え等を吟味することで自らの考えを深めたりするプロセスを大切にすることである。また、これらを通して、話し合うことの意義や必要性を児童生徒に実感させることも大切である。

また、例えば、P52で述べたICEモデルに基づいて、教師が適切な場面で児童生徒に「話し合い」のきっかけとなる質問をすることで、協働的に学ぶ際の学習の質を高めることが期待できる。

【話し合い】のきっかけとなる質問の例

I 考え・基礎知識	C つながり	E 応用・ひろがり
_____のリストをあげなさい	_____は_____にどのような影響をもたらしますか？	_____を予測しなさい
主な_____を述べなさい	_____を推定しなさい	_____に対する解決を提案しなさい
_____の文から例をあげなさい	ほかにどのような方法がありますか？	_____が持つ意味は何ですか？
_____をほかの言葉で言い換えなさい	_____にはどのような価値がありますか？	あなたの意見では_____？
_____とはだれですか？	_____と_____の関係を説明しなさい	_____から何を学びましたか？
_____が起こったのはいつですか？	_____は_____とどのような点で似ていますか？	
_____によると、_____はどんな様子でしたか？	_____と_____を比較しなさい	
	自分の経験から例を取って、_____に当てはめなさい	

(Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson『主体的な学び』につなげる評価と学習方法ーカナダで実践されるICEモデルー 東信堂 P26, 平成25年より)

(4) 「課題発見・解決学習」の評価

ア 学習の過程における質の変容を捉える評価の重要性

新学習指導要領には、評価について右のように示されており、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視する必要がある。評価に当たっては、児童生徒の実態に応じた多様な学習を促すことを通して、主体的な学習の仕方が身に付くように配慮するとともに、児童生徒の学習意欲を喚起するようにすることが大切である。その際には、学習の成果だけではなく、学習の過程を一層重視することが必要である。

小学校学習指導要領（平成29年）

第1章 総則（第3の2（1））

児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

※ 中学校、高等学校及び特別支援学校小学部・中学部も同旨

この「学習の過程を一層重視する」とは、学習の過程における学びの質の変容を確実に捉えることである。これにより、教師は、現時点で児童生徒がどのような状況にあり、児童生徒の成長を促すためにどのように指導すればよいかを具体的に考えるようになり、児童生徒の学びを深める指導を目指すことができるようになる。

イ 学習の質を高めるための評価

「課題発見・解決学習」の質をより高めていくためには、表面的な知識を身に付ける「浅い学び」で終わるのではなく、学んだ知識をつなげて新たなものに展開させていく「深い学び」に変えていくことが必要である。

そのためには、「考え・基礎知識」、「つながり」、「応用・ひろがり」と、知識をつなぎ、表面的なものから深い知識へと学びが深まる過程を評価することが必要である。



教科学習にこの評価法を用いる場合、質的な変容・高まりを特に求めたい学習場面において、ふさわしい「問い」（学んだことに独自の意味を見いだすことを要求するような課題）を設定する必要がある。評価する際には、設定した評価規準に「考え・基礎知識」、「つながり」、「応用・ひろがり」という段階をイメージしておくことが大切である。

また、児童生徒にはあらかじめこれらの段階を示し、児童生徒自身が学んだことをつなげてどこまで深めて考えていく必要があるのかを意識させることが必要である。

こうした質的な高まりの段階を教師が踏まえることにより、児童生徒の学びの質を高めるためにどのような問いを発したらよいのか、どのような学習活動がふさわしいのかという指導の工夫について、具体的に描けるようになる。

ウ 評価について

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」には、観点別評価については、小・中・高等学校の各教科を通じて、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理することとし、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して、学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではないことを示している。子供たちが自ら学習の目標をもち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められている。

また、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられることが示されている。

(5) 「課題発見・解決学習」の事例

授業において、教師が一方向的に「今日は〇〇について勉強します。」と宣言し、めあてを提示するといった形では、児童生徒の学習に対する課題意識や学習への意欲は喚起されない。「課題発見・解決学習」では、これまでの児童生徒の経験や既存の知識等との「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫を行うことにより、児童生徒に課題意識をもたせ、めあてを設定していくことが求められる。

しかし、全ての教科等で毎時間、児童生徒に課題意識をもたせるところから学習活動を展開できるとは限らない。「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・創造・表現」、「実行」、「振り返り」という「課題発見・解決学習」の過程において、それぞれどのような学習を設定するのか、単元全体を見据えて考えることが大切である。

次のとおり、県教育委員会ホームページに、各校種の事例を掲載しているので参照していただきたい。

【「課題発見・解決学習」事例一覧】

小学校・中学校の事例

【『課題発見・解決学習』実践のための事例集』に掲載されている事例】

平成 29 年度「学びの変革」パイロット校事業「課題発見・解決学習」実践のための事例集
ホームページアドレス

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/jreisyuh29.html>

高等学校の事例

高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクトホームページアドレス

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/juten-h29koukoukadaihakken.html>

特別支援学校の事例

特別支援学校における令和元年度広島版「学びの変革」アクション・プランの取組状況ホームページアドレス

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/r1tokushien-manahen-04.html>

2 「学びの変革」全県展開における取組

「学びの変革」全県展開のイメージは、学校の教育活動の様々な場面で、児童生徒が主体的な学びを実現している状態である。とりわけ、全教員が総合的な学習の時間をはじめ、各教科等において「課題発見・解決学習」をはじめとした「主体的な学び」を促す授業の実践や改善をすることが求められる。

そこで、平成 30 年度から、全ての小・中学校等（広島市を除く）において、組織的に「課題発見・解決学習」をはじめとした児童生徒の「主体的な学び」を促す取

組を進めるため、「学びの変革」推進担当教員を位置付けている。各学校では、『課題発見・解決学習』実践のための事例集』等を参考に授業改善に取り組むとともに、各市町の「学びの変革」推進協議会では、各学校の「学びの変革」推進担当教員が参加し、授業研究や実践交流、カリキュラム・マネジメントや資質・能力の評価方法等に関する研修等を行っている。

こうした取組により、各学校の授業改善が進み、主体的に学ぶ児童生徒の割合が増加する等の成果がみられた一方で、一部の授業において「課題発見・解決学習」等の実践が日頃の授業改善に充分につながっていない等、学校間・教員間で取組に差があるという課題がある。

こうした課題を踏まえ、令和2年度は、各学校において、「学びの変革」推進担当教員を中心に、次に示す「日頃の授業を見直す視点（例）」を参考として、全ての教員が日頃の授業の質の改善に取り組むこととしている。また、「学びの変革」推進協議会においては、各市町がそれぞれの実態に応じて、研修、研究協議、学校間の実践交流を充実させ、各学校のカリキュラム・マネジメント等の一層の推進を図ることとしている。

【日頃の授業を見直す視点（例）】

- 児童生徒の学習意欲を喚起させるような導入の工夫が行われているか。
- 教師が話し過ぎず、児童生徒が自ら思考し、表現できるような言語活動を充実させているか。
- 目標を達成させるために必要な協働的な学びの場を適切に設定しているか。
- 多様な考えを引き出す問いの工夫が行われているか。
- 本時の目標に対応したまとめを自分の言葉で表現させているか。
- 本時の目標を達成することができないと予想される児童生徒に対して、効果的な手立てを講じているか。

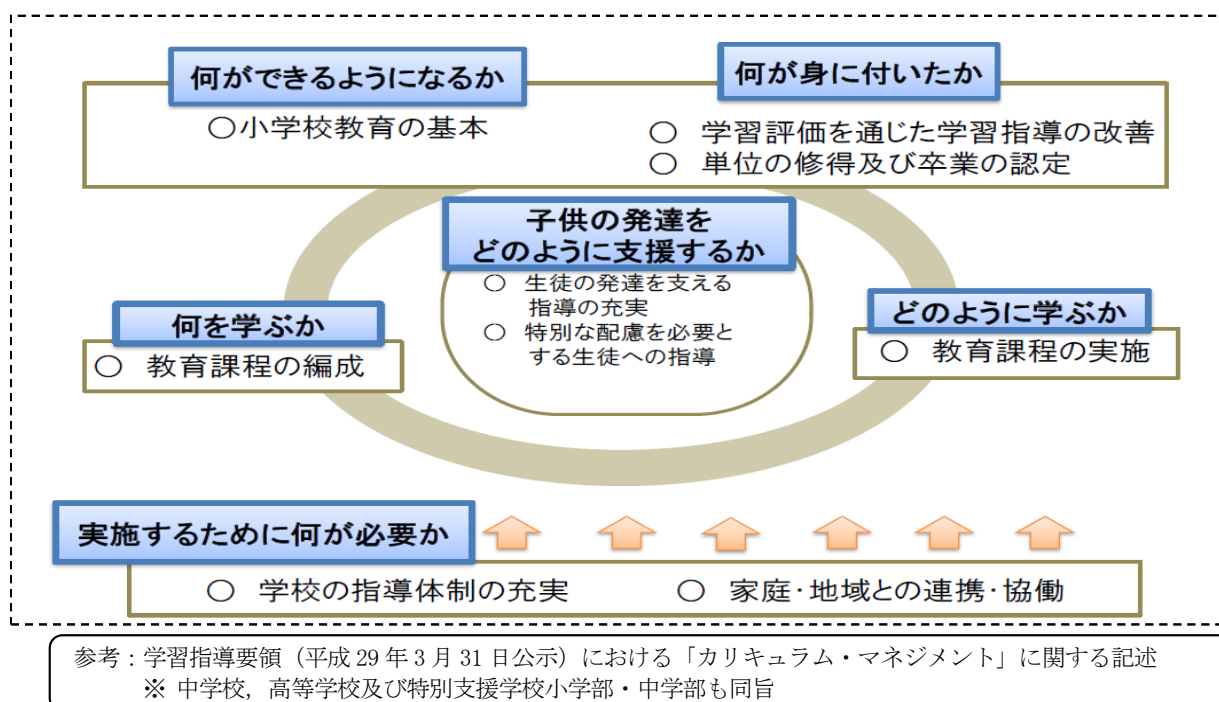
等

3 育成を目指す資質・能力の育成に向けて

これまでは、「何を知っているか」という知識が重視されてきた。しかし、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」では、変化の激しい今後の社会で活躍するためには、知識や技能に加え、情報活用能力、建設的批判能力、思考力・判断力・表現力等のスキルや、価値・態度、倫理観といったものを含めた資質・能力を総体とし、それらを育成する必要があるとした。新学習指導要領においても、同様な考えに基づき、三つの柱で資質・能力を整理している。本県では、既に、こうした資質・能力を育成するため、各指定校を中心に、「課題発見・解決学習」の単元開発を通して先行的に取組を進めてきた。今後、資質・能力の育成を目指す「主体的な学び」を実現させる上で鍵となるのがカリキュラム・マネジメントである。

カリキュラム・マネジメントは、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中

心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくことである。新学習指導要領においては、「児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」と定義されている。また、総則の記述は下の図に示すように、各学校におけるカリキュラム・マネジメントを円滑に進めていく観点から、教育課程の編成、実施、評価及び改善の手續を踏まえた項目立てがなされている。



教科等の目標や内容を見通し、特に言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。

各学校では、カリキュラム・マネジメントを行う際に、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを踏まえて、ランドデザインを作成し、学校教育全体を鳥瞰しながら、学校の特色を生かした魅力のある教育活動や授業づくりを行っていくことが重要である。

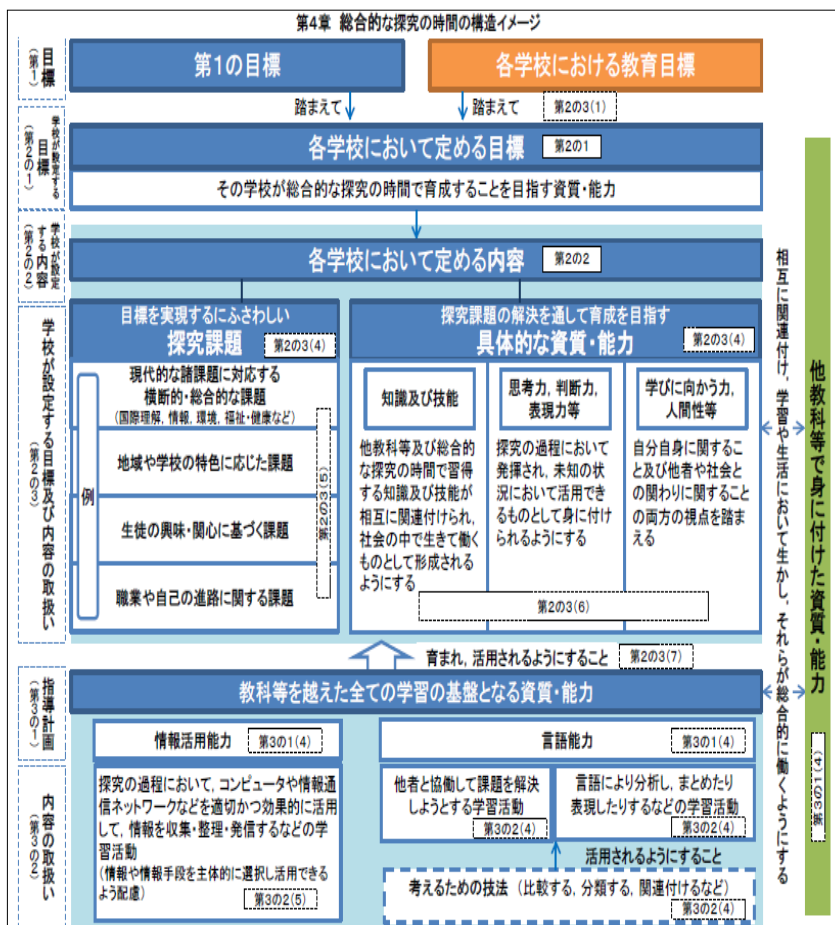
【主体的な学びの充実に向けたカリキュラム・マネジメントの事例】

カリキュラム・マネジメントでは、次に示す三つの側面を通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことが求められる。

- (1) 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- (2) 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- (3) 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

（「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編」p46～p50）

枠内の(1)はカリキュラム・デザイン（内容の組織的配列）、(2)がP D C Aサイクル、(3)が内外の資源の活用と捉えることができる。(1)では学校教育目標（育成したい資質・能力）の設定をした上で、全体計画、年間指導計画、及び単元計画の作成を、(2)では計画の実施、評価、カリキュラムの改善を、(3)では人材、予算、時間、情報等の確保を担うことが期待される。



「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編」

成において極めて重要な役割を担うことが今まで以上に鮮明となった。このことを踏まえ、以下に総合的な学習（探究）の時間を軸としたカリキュラムを編成するという、前述の(1)の側面を中心として行うカリキュラム・マネジメントの事例を次に示す。

【カリキュラム・マネジメントの三側面の内、(1)の側面を中心として行う事例】

各学校は目標を実現するにふさわしい探究課題を設定するとともに、育成を目指す具体的な資質・能力が探究課題の解決を通して身に付くようなカリキュラムの工夫が必要である。

例として、単元を貫く本質的な「問い」を中心に、総合的な学習（探究）の時間と教科・科目等の学習とが往還するようなカリキュラム編成を行うことが考えられる。ここでは本質的な「問い」を、各教科等を貫くような計画と指導となるような問いとしなければならない。自己の在り方生き方と不可分なものに結び付いていると捉えることが容易である地域や社会との関わりを重視した探究を児童生徒に深めさせることで、本質的な「問い」を児童生徒自らが立て、その「問い」を本質的に解決を目指すべき課題に高めることが期待される。

【「総合的な探究の時間」と教科・科目等の学習とが往還するようなカリキュラム編成】

- ① 「総合的な探究の時間」における探究の深まりと本質的な「問い」の設定
「地域活性化の特徴的な取組」という探究課題の解決に生徒が取り組んできたとする。探究が深まるにつれて、生徒は社会や世界との関わりにおいて自分の在り方生き方を求めていくようになる。その結果、「Society5.0 社会に向けた本校の地域における活性化とはどうあるべきか。」という本質的な「問い」を課題として設定する。このような課題を生徒に設定させるために、地域や社会との関わりを重視したり、生徒にとって学ぶ意義や目的を重視したりするよう、教師の意図的で計画的な指導が求められる。
- ② 他教科等における課題解決に必要な知識及び技能等の育成に資する単元の設定
本質的な「問い」から設定した課題の解決に向けて、生徒はこれまでの各教科等の学びと相互に関連付けながら探究を行うことが期待される。そのために、他教科等においても、課題解決に必要な知識及び技能等を各教科等の見方・考え方を働かせながら身に付けることができるような単元を構成する。
- ③ 教科等横断的な学習による深い学びの実現
この時間において、各教科等での学びを活用した探究を行わせることにより、個別の知識及び技能を概念的なレベルに高め、実社会や実生活において生きて働く本質的な理解へとつながるような深い学びを実現させることが期待できる。

また、教員間で本質的な「問い」を共有することも重要である。それにより、教員が総合的な学習（探究）の時間を軸に教科等横断的な視点と学年の系統という視点で、カリキュラムのつながりを意識しながら学校教育目標の達成に向けて学校全体で取り組んでいくことにも寄与できると言える。

さらには、(2)及び(3)の側面も踏まえて、校内外の豊富な人的物的な資源を活用しながら、カリキュラムの実施・評価・改善に不断に取り組んでいくことも大切である。

◇◇コラム 学び続ける力の育成のために◇◇

先行き不透明な時代、人生 100 年時代を生きる子供たちには学び続ける力が求められます。学び続けるためには、本質的な問いを意識することが必要です。それは生涯において何度も問い直され答えが更新され続けるような「人はなぜ生きるのか?」「自分は何者か?地球全体の持続可能な発展のために、自分には何ができるのか?」など、抽象的で、哲学的なものになるでしょう。

探究的な授業づくりにおいては、発達の段階に応じて、本質的な問いにもつながるような授業を考えていく必要があるでしょう。

具体的にはどのような授業でしょうか。実際に国際バカロレア（IB）の認定を受けている中学校で行われていた授業の一例を見てみましょう。

《中学校 理科 単元「宇宙・太陽系」》

次のような4人1組でのグループワークの課題を設定します。「あなたたちが地球以外の太陽系の星に移住するとする。その時に役に立つ『地球上履歴書』をメンバー全員分作ろう。」

すると、どんなことが起こるのでしょうか。移住する星を、金星に決めたとすれば、子供たちは金星について調べ始めるでしょう。「どんな住環境なんだろう?」「どんな鉱物があるのか?」など、ありとあらゆる情報を調べ、メンバーで共有していきます。次に、Aさんは「地球より暑いからシェルターが要るね。普通の建築材を持っていっても溶けちゃうだろうから、暑さに強い建築素材を開発しているメーカーはないだろうか?」と調べます。気になるメーカーを比較検討しながら、建築家としての履歴書を作り上げるでしょう。また、Bさんは、暑いから失神することもあるだろうからと、薬剤師や製薬会社のことを調べ、医療関係の職の履歴にしようと考えられるかもしれません。Cさんは、もしかしたら宇宙人が攻撃してくるかもしれないから、防衛関係の仕事の履歴にしよう…など、地球上の仕事と太陽系の知識とを関連付けながら履歴書を作っていくことになるでしょう。

最後に、他の班の履歴書を見ることで、自分たちになかった視点や太陽系の知識について、相互に補完しながら学習し、我々が生きている地球をメタ的にとらえる契機になることが期待されます。

《中学校 社会科 単元「産業革命」》

次のような課題ではどうでしょう。「身の回りにある機械を1つ選んで、その機械が世の中に出てくる前と後の年表を作ろう。」

ミシンを選んだ生徒がいたとします。その子は、ミシンが世の中に出てくる前の、手縫いの時代について考えます。手縫いの時代は1枚の洋服を作るには時間がかかっていたはずですが、しかし、ミシンがあると大量生産が可能になります。その結果、ファッショントレンドが生まれ、ファッションモデルやファッション雑誌編集者など、それまでにない職業などが現れたことに気付くことができ、産業革命という事象が歴史に与えた影響の本質的な理解に近づくことができるようになるでしょう。更に「では、この変革と同じように、現代について考えると、ICTの出現の前後で、どんな変化があったらだろうか? 今後は、どのように変化していくのだろうか。」という質問を投げかけることによって、産業革命について考えたことを、現代や未来に転用していく学びに発展させ、「持続可能な発展」について考えを深める授業づくりが期待できます。

このように「本質的な問い」を意識しながら授業をつくり、また子供たちの思考を高度化していくような働きかけを行うことができれば、子供たちの学び続ける力の育成につながっていくのではないのでしょうか。